

大学に勤務して数十年の歳月が過ぎるが、本年3月に図書館業務を通じて、最も嬉しいことがあった。2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞された大村智博士の学位論文を本学機関リポジトリに公開することができたことである。大村智博士の修士論文を手にとると、後にノーベル賞に繋がる研究者としてのスタートを本学大学院で切られたことに感銘をうける。大村智博士の修士論文は一ページ一ページが丹念に纏められ、更に経年による紙面の変化がより一層の重みを感じさせる。1962年当時、大村智博士が夜間高校で教鞭をとりながら、本学の大学院に通われた生活は、一般学生と比べ時間的にも厳しかったことと思われる。そこに並々ならぬ大村智博士の熱意と信念の強さ、真摯な姿を伺い知ることができる。

長い間図書館業務に携わり、いつの間にか仕事を教えてくれた先輩たちが、みな退職してしまった。現在は将来どのような図書館にしたいかを考えながら、仕事をしている。スペインの建築家アントニ・ガウディは、生前自分が設計した「サグラダファミリア」の完成を見ることができないことを認識したうえで、それでも建築にかかる費用を集めながら、サグラダファミリアの建設に没頭している。その事例を参考に、100年後の本学図書館の姿を考えながら、日々の業務を進めている。私自身が見ることのできない遠い将来に向かいながら今を整えている。冊子やebookの選書、リポジトリの運用。基礎的データベースの導入とアクセス分析。館内改修への対応。果たして自分はこの数年間、先輩が進んだように前進できただろうか。

アントニ・ガウディは何度も何度も仕事をやり直している。作っては壊し、作っては壊す。納得するまで続ける。しかも自分が亡くなった後は、自分が作るよりも、より良いものを後世の人々が作ってくれるとも言っている。

私達には先輩が残してくれたものを次の世代に伝えて行くミッションがある。しかしガウディのようには立ち向かえない。生きている間に完成したものを見て確認したいと考えてしまう。また、壮大なスケールに自分自身が飲み込まれてしまうような恐怖心も感じる。

大村智博士の著書『人間の旬』のなかで、研究者として一流であるかの判定基準として「限界のあることを知る」必要があると書かれている。この一節を読むとガウディも自分の限界を深く認識していたのではないかと推測する。だからこそ逆に、巨大な「サグラダファミリア」を造り続けることができたのではないかと思う。近年、国内の私立大学では従来働いてきた専門の図書館員の数

が急減している。本学でも目録カードをタイプライターで打ち、カードケースに配列していた図書館員は、私が最後になるだろう。時代や社会的システムの転換期にあっては、先輩たちの足跡を後世に繋ぐ役割は重い。時にはできないかもしないと感じる。そのような時、大村智博士の「限界のあることを知る」という言葉は、自分の幕引きをどのような形で行い、どのように繋いでいくかという思考経路に誘ってくれる。在職中に完成されることはなくても、次の世代の人々がここで働いた多くの人間の意志や構想や夢を繋ぎ、きっと自分が考えていた以上の結果を導いてくれるだろうという、確信へと浄化してくれる。すると安心して「今を生きられる。」という事実に気付く。

「限界のあることを知る」ということは、研究者に限らずほぼ全てのものに共通する。生きとし生けるものに限界があることを認識し、それでも未来に挑戦し続けていく。良い図書館を創りたいという願いは、行動に表れる。今日の仕事が後世に繋がることを信じ、時を恐れずに企画・立案をして行こう。まだ見ぬ未来の人々の心を振動させられるよう、躊躇なく働いて行こう。歌人岡野弘彦氏の短歌「腹筋の締りはいまだ若者におとるまじわがドルفينキック」を思い浮かべ、「今」を笑いながら大切に進んで行こう。

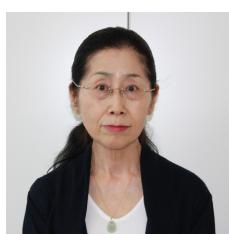
昨今はインターネットで世界の様子が手に取るようにわかる。異国バルセロナに響く、サグラダファミリアの石を刻む聖なる音が、自分の鼓動のように聴こえてくる。

註・参考文献

- 1) 大村智. 人間の旬. 毎日出版社, 2016, 218p.
- 2) 磯崎新. アントニ・ガウディとはだれか. 王國者, 2004, 203p.
- 3) フィリップ・ティエボー. ガウディ:建築家の見た夢. 創元社, 2003, 142p., (知の再発見双書, 107)
- 4) 岡野弘彦. 岡野弘彦歌集. 国文社, 1979, 199p. (現代歌人文庫, 14)

INFOSTA Forum

第306回
アントニ・ガウディから見える
自己の限界と未来



かのう のぶえ
狩野 延枝

東京理科大学 学術情報システム部
図書館事務課
(正会員)